

「全面的に調査を」

周辺住民、不安の声

読谷ダイオキシン

2014年の県調査で、米軍読谷補助飛行場跡地から基準値の8倍以上のダイオキシン類や21倍以上の鉛が検出されていたことを受け、住民からは不安の声や、周辺地域でのさらなる追加調査を求める声が上がった。

検出地周辺に地権者が多く住む波平自治会の知花安友会長は「廃棄物が捨てられていた場所は他にもあると聞いている。また出てくる可能性もあるのではないかと。全面的に調査した方がいい」とさらなる調査を求



「不法投棄監視中」などと書かれた看板の立つ、汚染された土壌や投棄物が見つかった場所＝22日午後、読谷村

人さん(17)は「跡地は通学でいつも通っている道にある。ショックだ。県には迅速に公表して対策を練ってほしかった。土をきれいにし、市民が安全に使える場所にしてほしい」と困惑した表情を見せた。

基地跡地新たな課題

読谷補助飛行場跡地で、汚染された土壌や廃棄物が処理されず放置されているのは、廃棄物が米軍によるものか特定できないため、制度上、どの行政機関が処理するのか明確になっていないからだ。今回汚染が発覚した場所は、返還前から自由に立ち入りできる場所だった。そのような場所に土壌汚染があった場合、浄化義務をどこが負うのか、新たな課題が浮かび上がっている。

調査した県は、土地所有者である村に原状回復の義務があるとし、村は返還前まで国の土地だったとして国に処理を要望しているが、どこが処理するのかめどが立たずに2年以上が経過している。汚染原因が米軍によるものか否かにかかわらず、健康に被害を及ぼす恐れのある

ダイオキシン類検出後の処理方法に問題がある。廃棄物を埋め戻してはいけない。対処が安易過ぎるのではないか。上から土をかぶせるだけでなく、飛散しないようにコンクリートなどで囲うなどの対策が必要だ。ダイオキシン類の濃度が高いが、廃棄物として見つかった電線やワイヤなどを燃やしたなら、このレベルのダイオキシンは出る。煙突があつたわけではな



識者談話

池田こみち氏 環境総合研究所顧問

飛散防止対策が必要

ている可能性もある。ダイオキシンを含む煙が隣近所の畑や土地に残っているかもしれない。特に今回検出された場所は村にダイオキシンは燃やした後の灰にも含まれたまま残る。過去の地歴を調べなければいけない。ダイオキシン類は水には溶けにくい性質だが、形で、アメリカ側に情報開示を求め、下流に流れたりする可

村渡慶次に住む40代の女性「ダイオキシンが見つかった。農地になる場所なので、食の安全にも関わる。しっかりと検査して村民の安全を第一に考えてほしい」と不安を口にした。

が置き去りにされている。一方、調査をした県は「公表の義務はない」とし情報を公開していない点も問題だ。村も県の報告を受け汚染を知りながら、住民に説明していない。4地点以外の追加調査も行わず事

業を進めている。有害物質が検出された土地は農地となる予定で、農産物への影響も懸念される。判断の根拠が問われる。村や県、国との三者間で「調整中」とし対応できていないことが事態の長期化

を招いている。早急に「宙に浮いた状態」を解消し、住民の安心・安全を重視して廃棄物、汚染された土壌の撤去や追加調査などに取り組むことが求められている。(清水柚里)